

# せなをむこ

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第二十九号（一日発行）  
平成四年二月一日

## 「場所請負制度」の廃止

近藤 芳一

場所廃止に関して、開拓使は次のような条件を出した。

○本陣（運上家）それに付属する二八倉、その他既設設備は官が買い上げる。

○漁場は、漁場持ち、従来の漁民（浜方）、出稼人、新規希望者に貸し付ける。

○支配人、番人であった者は官において使用する。（権少主典以下）

○その他

以上のことから、種田氏は古平漁場のほとんどを占め、希望する漁民に漁場を貸し付けていたと考えられる。

第二に、運上家とそれに付属する既設設備を官に売り払って

いる。その後、税収掛として運上家で引き続き従来の仕事を進めていたようである。  
種田氏が官に売り払った内訳は次の通りである。

金持ちはますます

貧乏人はいつまでも

若松 定備（談）

金ぶとり

山に行かないと見られないよう

なトドマツの大森林が、平地にどこまでも続いている。  
わしは北の方で土木作業をしていたが、人手が足りないせいもあって金取りは良かった。しかし請負師の中にはひどい奴が

山に行かないと見られないようなトドマツの大森林が、平地にどこまでも続いている。  
わしは北の方で土木作業をしていたが、人手が足りないせいもあって金取りは良かった。しかし請負師の中にはひどい奴が

開拓使より種田氏にあてた明治二年の文書

今般御仕法替相成候二付  
其方所持之蔵五棟御入用二付御買上相成代金七一四兩  
永三文ハ追而□渡可相成候  
条其旨可相心得候事  
但証文申付ル  
未二月（明治四年二月）



いた。給金の代わりに伝票を渡して店の買い物にはその伝票を使わせ、最初は信用させておいて、いざ切り上げになって精算する時になると、金も払わないでいなくなる奴、出稼ぎ人夫を連れて行って会社から前借りしては、それをそっくり持ち逃げする奴、全く油断も隙もなかった。またそのころ、樺太では酒造りに税金がかからないというので、樺太で酒を造り、それを本州へ持って行って売るという頭のいいのもいた。

出稼ぎに行った者も金取りがいいからといって、それで金を残す者はほとんどいなかった。金が入ると気が大きくなって酒や女に使ってしまい、帰るに帰れず、また働くことになる。

樺太に来ている人を見ると、金のある人が貧乏人かのどっちかだった。「金を持つとバカになる人間と、利口になる人間とがある」と言うが、樺太では金持ちは事業をしますます金を儲けるし、貧乏人は金を持つとバカになるのが多いようだ。

# 一兵卒から見た

## ノモンハン事件

(上)

「ノモンハン事件」とは——  
 十四年五月十一日から九月十六日、ソ連軍と停戦協定が結ばれるまで、旧満洲北部で起きた日ソの国境紛争事件である。  
 この僅か三か月の戦闘で、日本軍は戦死者一万九千人、負傷



者二万六千人という大損害を受けた。ソ連側の死傷者九千六百人（これはソ連側の発表であるが、日本軍の前線部隊はほぼ潰滅状態になったため、今もって正確な数が分かっていない）

このノモンハン事件が起きたころ、私は北満チチハルの馬占山の兵舎にいた。兵舎は灰色の

一階建ての小さなれんが造りの家だった。

師団通信隊に所属する、やっとな星一つの二等兵（一番下の階級）として無線通信士の教育を受けていたころであった。

閉ざされた情報社会だったので、「いよいよ戦争か」。死ぬ覚悟もなんとか出来たようだが（教育とは恐ろしいものだ）、それよりも、本番でうまく電報を打ったりとったりすることが出来るのか、そっちの方が心配

だった。

それから何日かたって、動員令が下った。そして派兵まで待機の命令であったが、その間の訓練の激しいこと、死ぬ思いであった。暗号、通信法、アンテナの方向の応用と、実戦のような毎日で、げっそりとして目方も減った。だがこの二か月で、私はすっかり自信をつけた。

七月中旬、師団司令部付きとして派兵の命令が下った。そこから汽車でハイラルに向かったが、ハイラルの街は兵隊で埋まっていた。

そこで仮寝をし、翌日、目的地のノモンハンに向かった。兵隊は徒歩だったが、通信隊は民間から徴発したトラックでありがたかった。

車で行けども行けども草原ばかり、途中、負傷兵がトラックに荷物のように積まれて行くのを見た。「これは負け戦だ」と直観的に思った。将軍廟（びょう）という所を通ったが、トラックの残骸、馬の死体がごろごろしていた。墜落した飛行機の残骸、空爆の跡、ノモンハンまであと少しとなったが、行く程に惨状が生々しく、草の焦げる臭い、野砲弾の炸裂する音、飛行機の爆音、私は煙草の火がなかなかつかかなかった。武者ぶるかい？ それとも怖さか？ 分からない。激しい、死ぬほど辛い訓練もしたが——これが戦争なんだ。（つづく）

## 寄贈のお礼

田口 博久さん 二冊  
三山神社書類綴り 二冊  
常本 利男さん 十六点  
下張りの古文書 十六点  
高橋 健一さん 一台  
あんどん 二個  
渡辺 清春さん 一卷  
仲谷ヒロ子さん 全八巻  
鎌建場 図（軸） 七冊  
関川 春枝さん 一冊  
毎日新聞縮刷版 二枚  
杉本 隆さん 一冊  
国定教科書 二枚  
松尾漁場帳簿 一冊  
昭和二年消印はがき 四枚  
年末・年始、祭典大売り出し  
ちらし（昭和十年ころ）





# いろいろの暖かさ——

池田 テール



「山の神様」は中央通りに面して鳥居があり、そこからひっこんだ所に祀られていました。大きな石碑のある境内（今の農協）で、近くの子どもたちは鬼ごっこや、縄飛びなどをしてよく遊びました。

三、四才のころですが、そそっかしい私はよく転びました。そしたらある女の子が、わら草履と私の履いていた下駄とを取り替えてくれましたが、それがとても軽くて走りやすく、夕方家に帰るまで貸してもらったことが忘れられません。そのころはわらで作った履物が多く、わらじ・つまご・ふかぐつなどがありました。古平では当時米は作られていないので、材料のわらは米の空俵などを使って、農家の人が農閑期を利用して作ったり、また器用な人は自分で作

っていたようです。

鳥居の横からは関口さんの広いりんご畑で、その花いっぱい的小道をよく駆けっこしたものです。家の前まで行くといかめしい門があつて、門番のおじさんが、「ここからは駄目」と目で合図をしますので。夕方になると門は閉められます。私は母と何度か関口さんの家に行ったことがあります。門からは大

## 積丹半島へ鉄道敷設を

(六)

「鉄道がつく！」 歓喜する町民

きな飛び石の道があり、池もあり、家の側には番犬が繋がれていました。町並みから離れたこの家を夜になって遠くから眺めると、よく祖母から聞いた昔話に出てくる山寺か、盗賊の住み家を思わせる囲炉裏の側に私を引き寄せては、冷たい手を温めてくれた。昔話を聞かせてくれました。そのころ私には絵本も玩具も無かったので、物語を聞くのが大好きでした。囲炉裏の上の火柵に干されている手袋やつまごを見上げては、祖母の話に聞き入っていました。

年が明け昭和二年十月四日、鉄道省から志賀鉄道参与官、中村鉄道建設局長の一行が、鉄道敷設線視察のため陸路自動車で来町した。

この日は町長を始め、町会議

され、延長三十三マイル、建設費七百八十七万八千円が計上された。

昭和三年一月、衆議院が解散になり、二月に第十六回総選挙が行われた。そして、翌年開かれた第五十六回通常議会で、余市・余別間鉄道三十三マイル、建設費七百八十七万八千円が提案され、これが衆議院を通過したのである。

この朗報は、折から上京中の陳情団から直ちに電信で役場に送られ、それを伝え聞いた関係者や町民が続々と役場に集まり喜びと「万歳」の声に沸いた。また「余市・余別間鉄道敷設法案衆議院を通過」の張り紙がいち早く町内各所に出され、町内は鉄道敷設の話で持ちきりであった。

思えば、永年にわたる陳情と努力を重ね、夢にまで見た念願の鉄道がいよいよ実現への第一歩を踏み出したのである。



ニホ・ボ

# 難しい北海道の地名

北海道の地名の多くはアイヌ語からつけられたもので、それに無理して漢字を当てはめたので、初めての人だと読むに読めない。

文化四年（一八〇七）、徳川幕府は箱館奉行に命じて、蝦夷地の地名をか

で書くことにさせた文書を出している。

文化四年丁卯八月二日

蝦夷地の地名、是迄さまざまに文字を認候得とも、不宜候間仮名又は片仮名にて認可申旨、備前守殿被仰渡候段、摂津守殿被仰聞候。

右の通八月二日、戸川筑前守殿（箱館奉行）御達被成候。

このころの北海道地図を見るとカタカナで書かれた地名が多いのに、現在の市町村名ではかな書きが珍しい。

それでは「古平」について資料から当たってみよう。

- フレーピラ（赤いがけの意）
  - フルピラ（小山のがけの意）
  - クルピラ（模様のあるがけ）
  - フウレヒラ（説明なし）
  - フルヒラエ（説明なし）
  - フルヒラ（場所絵図にあり）
  - フルピラ（フウレヒラの略）
- これらの名前のうちから、結局、フルピラを選び「古平」という漢字をあてたのであるが、「振平」と書いたものもある。もともとはフルピラ川に由来している。

## 「今日はこんな日」

### 雪解けと大雨で大洪水で大洪水 稲倉石では自衛隊が救援活動

昭和42年

二月二十二日、本道では異常な暖気と大雨で、各地で融雪洪水や雪崩が発生した。古平町でも新地方面で床上浸水などの被害が出たが、稲倉石地区では例のない大きな被害が出た。

稲倉石川上流で雪崩があり、それがダムのように川水をせき止めたため、やがて鉄砲水とな

っている。漢字の地名としては、まあ読みやすい部類だろう。だが、しゃこたんⅡ積丹が出るのに、ふるびらⅡ古平が出ないワームがある。また、赤平市はその地名の語源からみると、古平とは一卵性双生児？の間柄にあると言える。

ところで、「嫌侶」という地名をすんなり読めるだろうか。いま、大型リゾートとして人気の高い赤井川村のキロ口、これは昔の人がひねり出した「キロ口」の当て字である。

険は夕方まで続いた。

町では孤立した稲倉石地区の住民救援に、自衛隊の出勤を要請した。同日夜、まず三十余人の隊員が現地に着。翌朝、さらに百余人の自衛隊員と古平消防団員が相次いで到着、医薬品等の救援物資も届けられた。

この災害には災害救助法が適用され、被害の様子はテレビで全国にも放送された。

- 家屋の全壊 十六戸
- 家屋の半壊 二戸
- 床上浸水 十戸

倒壊した家屋の下敷きになり生き埋めになった人が四人いたが、住民の必死の救助活動により無事救出された。

この日の全町的な災害に自家の浸水をかえりみず出動し、救助活動に当たった消防団員六人に町長から表彰状が贈られた。

- 部長 安沢仁太郎・二分団
- 班長 村井 重利・同
- 同 藤田 秀一・一分団
- 同 加藤 健一・同
- 同 堀川 博行・同
- 同 宮津 昇二・二分団

って住宅街に突入して来た。濁流は谷間の道路をいつ気にも下り、集会所・診療所・浴場・生協や住宅はあつとと言う間に倒壊し、ブルドーザーをも押し流してしまった。

事前に消防団員からの緊急避難の連絡があり、僅かな家財の持ち出しをした人もいたが、危